

# 「土から体へ」薬草・漢方薬の長い旅

奈良には、薬草・漢方薬に関して脈々と続いてきた歴史がある

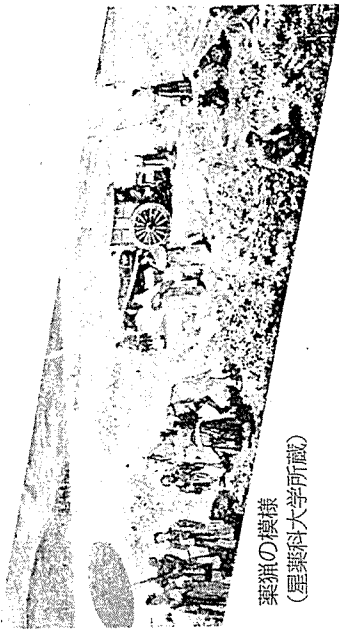
平成二十三年秋～平成二十四年冬 薬事日報社連載



- 1章 宇陀・阿騎野と薬獵（1）
- 2章 宇陀・阿騎野と薬獵（2）
- 3章 奈良県における生薬栽培復活への道筋
- 4章 森野賽郭の逸話 旧薬園の現状・今後の課題
- 5章 「天然痘」根絶に尽くした久保耕庵、良平兄弟
- 6章 宇陀から製薬企業の創業者を輩出
- 7章 大願寺の薬草料理について
- 8章 高取町の薬獵から1400年
- 9章 大和高取藩植村城主の沿革と藩政
- 10章 薬獵が始まって1400年 壺阪寺と薬
- 11章 たかとり「神農薬祖神祭」
- 12章 高取町における薬草栽培計画について
- 13章 古都奈良の新世纪植物機能を求めて
- 14章 下市の薬園と薬種問屋の話
- 15章 万葉の薬園プロジェクト～大和シャクヤクの復活を目指して～
- 16章 漢方薬と中薬と生薬製剤

- 宇陀市教育委員会文化財保存課 主幹 柳澤一宏
- 宇陀市教育委員会文化財保存課 主幹 柳澤一宏
- 慶應義塾大学 教授 渡辺賢治
- 森野旧薬園 森野燾子
- 宇陀市教育委員 瀬山和英
- 宇陀市教育委員会文化財保存課 主幹 柳澤一宏
- 大願寺住職 高祖昭稔
- 京都教育大学 名誉教授 和田萃
- 橿原市文化協会 会長 戸田守亮
- 壺阪寺住職 常磐勝範
- 奈良県製薬協同組合理事長 梶谷順久
- 高取町薬業連合会長 中村善之
- 畿央大学大学院健康科学研究科教授 北田善三
- 株式会社 前忠 代表取締役 前 忠兵衛
- 万葉の薬園協議会 代表 山辺元康
- 日本生薬連合会技術参与 嶋田康男

# 「土から体へ」 葉草・漢方薬の長い旅



葉狩の様相  
 (星薬科大学所蔵)

## 宇陀・阿騎野と葉狩 (1)

### 宇陀市教育委員会

奈良県は、古くから薬草との関わりがある。今から1400年前の西暦611年には、推古天皇が宇陀地方で葉狩(くすりがり)をしたという記録が『日本書紀』の巻二十二にある。さらに近年には、奈良県の高取地方でも同様の葉狩から1400年目を迎える。わが国の医療は、寺院等において民衆を病から救済しようと、草根木皮を利用した施薬を行うことから始まった。特に、漢方薬は、古代中国の医学が日本に伝わり、その後わが国での経典も加味し、独自に発展した漢方医学に基くもので、長い歴史の中で人々の健康に大いに寄与してきた。

県内には、漢方や生薬に関する題材が多く、奈良市には正倉院の宝物、鑑真和上ゆかりの東大寺や唐招提寺、薬師如来を納めた薬師寺などがある。また宇陀市では、推古天皇の葉狩、森野薬園、葉の館などの施設も残存する。今回、このように奈良にしかない題材について掲載シリーズ『土から体へ』葉草・漢方薬の長い旅と題して、葉にゆかりの深い宇陀、高取地方を紹介すると共に、11月9日に開催される漢方薬日中シンポジウムの講師陣、実行委員の専門家などからも日本の漢方薬を未来につなげる上で、抱える課題点について考察していただく。

『日本書紀』推古十九(六百一十)年五月癸に「夏五月の五日に、菟田野(うたのの)に葉(くすり)狩(がり)す。鴨(か)明時(あかつき)を取りて、藤原池の上(ぼら)りに集ふ。会頭(あいは)を以(も)て乃(すなは)ち往(ゆ)く。(以下略)」といった記載がある。菟田野(うたのの)は宇陀野(宇陀の大野)のことであり、現在の奈良県宇陀市大宇陀湯間にある風紀神社周辺の阿騎野(あきの)のことを指すと考えられる。この記載は、史料で確認できるわが国最初の葉狩の

記録でもある。葉狩の際、男性は薬効の大きい鹿の角をとり、女性は薬草を摘んだ。宇陀野への葉狩の記事に女性の姿は見えないが、天智七(六百一十八)年に薄生野で行われた葉狩のように女性も参加したのであろう。葉狩の源流は、高句麗王蓋が三月三日に葉遺の丘で行った鹿・麋を狩る行事と、古代中国の豊江中城城で五月五日に行われた雄薬を摘む民間行事にあり、推古朝には、源流が異なる行事を併せて壮麗な宮廷行事としたとされる。前述の菟田野への葉狩では、冠位十二階に基く冠をつけ、冠と同色の服を着用し、冠には飾りを用いた。このような服飾は、高句麗と類似しており、葉狩の源流とも深く係わっている。推古十九(六百一十)年五月五日の宇陀野での葉狩に続き、翌二十年五

月五日には羽田(はた)で葉狩が行われている。以後『日本書紀』には、推古二十二年と天智七(六百一十八)年の五月五日に葉狩を行ったと記載されるのみであるが、皇室儀礼として毎年五月五日には、葉狩が行われていたとあろう。奈良時代になると、宮外での葉狩は行われなくなり、これに代わって平城宮北側の松林苑(しょうりんえん)で騎射や鷹が開催された。平安時代には形骸化し、天皇は騎射を見るに過ぎなかった。端午節(くわんご)行事として、靛藍が青靄(あざ)じょうぶかづら)を身に付けたり、薬玉(くすりたま)を柱(はしら)にかけたりしたのは、葉草を摘んだ葉狩との関連をなすのではあろうが、伝説的なものであつた。(参考文献、『新訂大宇陀町史』本編 千九百九十二)

# 宇陀・阿騎野と薬猟 (2)

## 宇陀市教育委員会

『日本書紀』推古十九年の薬猟の記載は、宇陀を舞台としてわが国の薬猟が開始され、宇陀の地が王権の御場(禁野)であったことを示している。

では、宇陀が王権の御場とされた理由は何であったのか。まず宇陀の自然の豊さを挙げる事ができる。豊富に生息する鳥獣、多種多様な薬草の繁茂等、すでに5世紀後半には夫人部(しひひと)や鳥養部(とりかひ)などの部民が宇陀に設置されており、その頃には、王権は宇陀を極

好の御場としていたことが知られる。そして今一つは、宇陀と神仙(しんせん)思想との結びつきである。

ここに二つの史料をあげる。その一つは『日本書紀』皇極五年五月条に菟田郡の人、押坂直(おしさかのあたひ)と童子が菟田山で生きたいた紫のキノコを食べたところ、病気をせずに長命を保ったという記事である。このキノコは、芝草(しやくそう)とあるといわれている。

巻第十三話に「女人、風声(みさお)の行(わざ)を好み、仙草(せんそう)を食ひて、現身(みよ)に天(あま)に飛ぶ縁」という題の説話がある。その内容は、宇太郎の塗部(ぬりべ)の里の女が日々水浴し、慎み深く宇陀の山野の野草を摘んで食べていたところ、孝徳朝の甲寅(こうとく)の年(654)に天仙(てんせん)となって空を飛んだという。

もう一つは『日本書紀』上興記(じょうきよ)の「上巻第十三話に「女人、風声(みさお)の行(わざ)を好み、仙草(せんそう)を食ひて、現身(みよ)に天(あま)に飛ぶ縁」という題の説話がある。その内容は、宇太郎の塗部(ぬりべ)の里の女が日々水浴し、慎み深く宇陀の山野の野草を摘んで食べていたところ、孝徳朝の甲寅(こうとく)の年(654)に天仙(てんせん)となって空を飛んだという。

# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

『万葉集』に「宇陀の真赤土」とあるように、宇陀は水銀の産出地として知られていた。その開発は古く、すでに3〜4世紀には古墳に用いられた大量の朱(丹砂)は、不老不死の妙薬とされる仙薬の主たる成分であった。

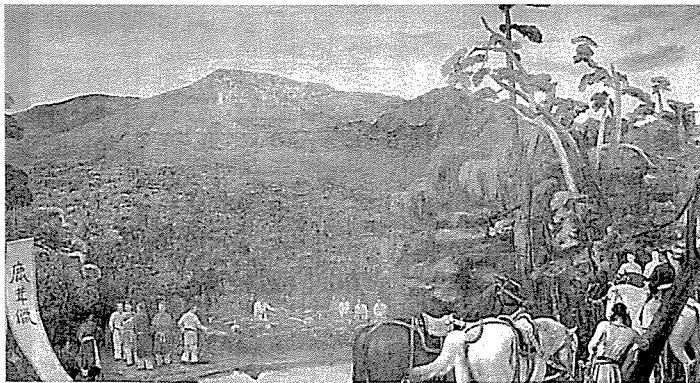
しかし、猛毒である水銀を直接摂取することは不可能であるため、水銀の産する地の水、鳥獣の肉、野草、山菜、キノコ、果物などを摂取することで、間接的に水銀を摂取できると考えられたのであろう。

先の『日本書紀』や『日本書紀』の記載も、水銀を産する宇陀の地で水浴をしたり、野草や芝草を食べたことで神仙の効能を持つようになったと考えられる。

考えられたことには、宇陀の地には人を天仙とするような聖なる力があると考えられていたのだから、宇陀に「聖なる水」を王権に貢進すること

を職掌とする主水部(もひとりのべ)が設置された理由も、こうした觀念に基くものと思われる。

(参考) 文獻: 『新訂大宇陀町史』本編 千九百九十二



薬猟の様子

# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

私は漢方医学を専門としていて、去年も引き続き荒井正言知事の下で結成された「東アジアの未来を考える委員」の末席に加えていた。ネーターを務めさせていただいた。奈良県との縁は、昨年の平城京遷都1300年の委員としてお手伝いをさせていただいた。

たことがきっかけで、本年も引き続き荒井正言知事の下で結成された「東アジアの未来を考える委員」の末席に加えていただいている。

漢方は中国のものと思われている方も多いかもしれないが、わが国に伝来してから1500年以上の時を経て日本化したのが、今の日本の漢方である。正倉院には漢方の原料である生薬が多数納められており、

1250年の時を超えて現在とつながっている。これに関しては平城遷都1300年記念出版「NARASIA」という本に書かせていただいた。

国内では、今や漢方薬は医師の8割以上が日常診療に用いており、医療現場では欠かせない存在となっている。一方で、これまで1500年続いてきた日本の漢方が存続の危機に直面している。

現在、原料である生薬のわが国の自給率は12%であり、8割超を中国からの輸入に依存している。ところがグローバル化が進む中、ローカルで

あった伝統医学に注目が集まり、世界における生薬需要が高まると同時に、経済発展を遂げる中国国内でも需要が高まった。その結果、生薬の消費量が世界的に増大している。加えて中国の経済発展による人件費高騰や

## (3章)

# 奈良県における生薬栽培復活への道筋

慶應義塾大学医学部漢方医学センター

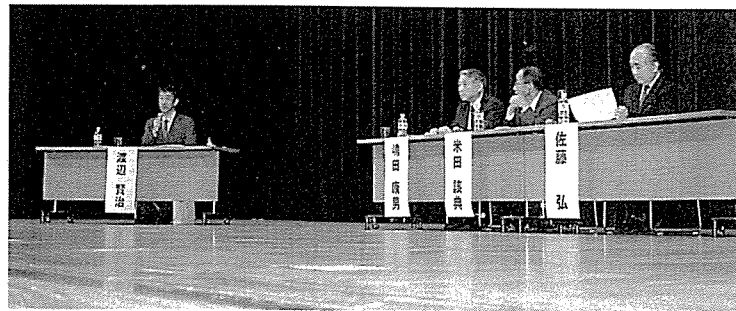
渡辺賢治

009年、事業仕分けで漢方薬に保険適応がなくなりそうになった際に、3週間で92万人の署名を頂戴した結果、保険適応が存続となったが、漢方薬の原料である生薬が枯渇したら漢方診療は存続できないことを、日本の

この現状を踏まえて、シンポジウムでは持続可能な漢方医療のあり方が討論された。奈良県論でシンポジウムを閉じた。

①奈良の持つ強み、魅力というものを最大限に引き出し、この長い歴史、生薬の伝統といっ

とに誇りを持つこと  
②伝統は、廃れると復活するのに本当に時間がかかる。奈良にノウハウが残っているうちに、後継者の育成というものをきちんとしてやること  
③中小農家で苗から栽培、収穫、加工までの全てをやるのは限



熱い討論が交わされたパネルディスカッション

ら日本の生薬栽培の復活をすすめるために、以下の結論でシンポジウムを閉じた。

①奈良の持つ強み、魅力というものを最大限に引き出し、この長い歴史、生薬の伝統といっ

(4章) 森野旧薬園

森野賽郭の逸話

旧薬園の現状・今後の課題

森野薫子(森野旧薬園)

森野旧薬園は、現存する日本最古の私立植物園で、大正15年に園の文化財保護法に基づいて指定された。今から80年ほど前、森野通貞(のちの賽郭)によって開かれた。もともと種は農薬の傍ら、毒物の製造を業として蓄積して

のをも知られるようになった。通貞自身は若い時から本草学、薬種に興味を持ち、その研究に親しんでいた。当時の八代将軍吉宗は、それまで輸入していた中国産の薬品が高価で一般庶民の手に入りづらく

のを養え、殖産興業の施策の一環として、園内で増やすために種を採取して派遣した。そのうちの一人、檀村左平次が大和地帯にきた時、当時の代官の推挙により、薬種習として出仕した。檀村氏に従って、先ずは垂山から興字陀、吉野群峰、高見山、金剛山など、現存も入りこへい深山奥谷を4

度ほど通貞の採取の苦労を察し、享保14年(1729)に檀村氏の管理する駒場細薬園の貴重な薬草を初回6種(甘草、ニンジン、オウゴン、クマドリ、サトウ、ニッケイ、ナツキハゼ)をはじめ、その後、何回かにわたって贈った。通貞はこれらを、自家の薬山を拓き種

を切り盛りした。享保13年(1728)、

この松山は大火にひとなめられ、家も罹災したが、賽郭は目を果たすため家にも帰らず採集の旅を続け、というも、佐兵衛という番頭さんがいたから。この災難に

が旅から帰って来て、すでに新しい家が出来上がったという。賽郭、佐兵衛二人の誠実な人柄とお互いの信頼関係があつてその逸話である。賽郭は、明和4年(1767)3日、賽郭はまた死もせず生きもせず、春秋ここに築き出す」と辭世を歿し78歳で病没した。子武貞は親の功績を偲び、藩の小高い所に堂を建て、賽郭夫妻、忠僕佐兵衛三人の肖像を祀った。それ以来、現在に至るまで40年にわ

たって正月三ヶ日、小正月、節分、二節句、大晦日は晴暁、それぞれ旬のものを使った献立の三人分の供養膳を供えるものがある。開園から二百数十年にわたって代々絶えるものを継ぎ、新しきものを増やすとの遺訓を念頭に置いて努力し、何とか保存してきた。しかし、この50年、その当時と比べると夏の気温がかなり高くなっていること、薬草の補給によつて枯れるもの、育ちにくいもの、毛テラ、虫の増殖、また

植物は大きくなり、畑の部分まで根を張り、育てる環境が大きく変わった。現在、旧薬園は町内の原野悦良氏(とうき)の時から薬草を育て自ら食し、薬効を確かめ、研究に力を注いでおられる現代の本草家(とうき)の協力によつて保存されている。氏の努力によつて多くの薬草が復元され、生き返った。

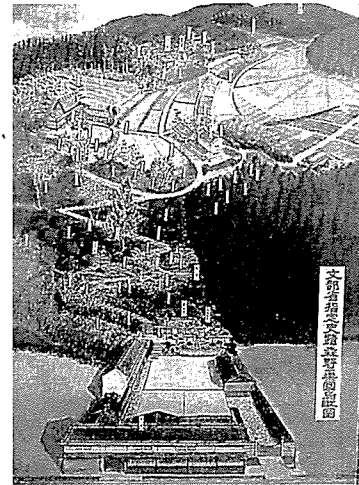
薬草の種類によつて、一年生、二年生、多年生などあり、毎年同じ養分を吸い上げるため、土壌

改質、場合の異動、春秋にはくわを入れて土を柔らかくし酸素を補う。貴重な珍しい種ほど育成が難しく手間がかかる。その間、年々4度の除草など。

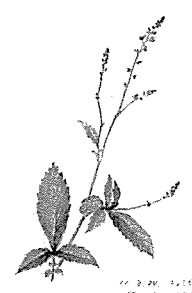
これからの薬園を維持していくには、▽薬草に対する知識をもつて、人々の関心を高め、▽薬草の特性(自生、多生、一年生、二年生、多年生)を把握し、風通し、地質、種を時、時期、苗の種を育てるを知る。▽育てるための夏の暑さ、冬の寒さに耐える体力(根張り)責任感、薬草を扱う心。▽薬用植物学(歴史)あるこの薬園は起伏と自然に富んで植えるが故に、とくに「種の保存」「薬園の自然環境の保全」等々に努める資料、機器の搬入時の拡充が緊急の課題になる。



薬草・漢方薬の長い旅



森野薬草園当時の全図



キンミズヒキの挿絵

# 土から

## (5章) 「天然痘」根絶に尽くした 久保耕庵、良平兄弟

瀬山和英 宇陀市教育委員会教育委員

文化11年(1814) 久保順介(米山の五男) 5月28日、宇陀松山下で 岡青洲に乳癌の手術を交 けた人がいる。和州宇田 万町(現在の宇陀市太平 陀方六町)黒木屋清七の 妻である。この頃、宇陀 松山には、四十九軒の薬 種商があった。 久保良平は、文政9年 (1826)11月4日、

父順介が没した。6 年は良平が十歳の時、父 の死後、十歳上の兄耕 庵が何かと良平を継支 援した。耕庵は、谷三山 も益壽の信頼を寄せる医 師で、遠く宇陀松山から 大和八木までの往診を頼 に入門した。生家の 近くに、享保年間に野 藤助の開いた薬園があ り、父が医師、兄も医師 という影響が大きかっ た。入門は、良平十七歳 の天保13年(1842) の8月。適塾入門者は 38人でその22番目に和 州宇陀郡松山、久保良平 (良平)の名がある。大 和からの門入りの輩中 参である。緒方洪庵適塾 といふは、人類の敵「天 然痘」根絶に尽くした 功績である。 さて、享保元年(18 40)11月、洪庵は牛痘 苗を和州肥前より得て除 痘館を創設する。良平二 十四歳の時である。奈良 での種痘事業は、どうで あったろうか。大阪除痘 館から分館受けて地方 で種痘事業を行った人は 9人いるが、その中に、 入塾の早い河田雄嶺と並 び久保良平の名がある。 郷里松山に帰った久保 良平は、兄耕庵と「宇陀 除痘館」を設立。大和諸 郡の医師に呼びかけ説 得。今井、八木、三輪、 田原本、高田等に出張所 を設け種痘を行った。こ こが、悪説が流布「牛 痘は益なきのみならず、 却って子供に害あり」と 言い、あけく果ては、 牛になる、との風評が出 る。船中、その説得に苦 労を重ねた。そして宇陀 吉野の山間では、殊更に あったろう。



中央に座すコッホの右隣が北里紫三郎氏、 2列目左から2番目が久保氏

わたしたちは、耕庵、良 平の名と共に記憶される べきである。次いで文 久3年(1860)式下 郡新屋敷の村山左祐、慶 応2年(1866)に高 取藩藤井十平、郡山藩谷 見龍、吉野十津川郷中沢 傳之丞と続くのである。 藩医に先駆けた町医、久 保兄弟を松山の人は、ど れほど誇りに思った ことだろう。 明治30年(1897) 8月20日、久保良平は七 十二歳の生涯を終える が、生涯を天然痘根絶に 尽くした努力が実を結 び、明治32年に全面の天 然痘患者は15人で、 うち死者は246人、わ が奈良県は患者、死者と もに発生しなかった。 久保兄弟は、良平以後、 常三、豊一郎、孝夫、と 代々医業を継ぎ、現在久 保良一先が良平の生ま れ育った土地で開業医と して町の人々の信頼を集 められている。なお、 明治42年8月、ローヘル ト・コッホ夫婦が奈良に 来られた時、北里紫三郎、 富島幹之助、志賀宗彦、 久保常三、奈良県公会堂 前で撮られた写真が、今 も久保家に大切に保存さ れている。

# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

宇陀市大宇陀拾生には、江戸時代中期、享保十四(1729)年に森野養軒(さいかく)によ

て創られた薬園がある。この薬園は民間の薬園として創始されたもので、その後も継承され、史跡「森野旧薬園」として今日に至っている。

森野養軒は早くから本草の研究を行い、屋敷内に薬草類を栽植していたと思われるが、薬園として機能してゐるのは、幕府の採薬使に随行した享保十四年の薬草見分からである。この薬園は、次第に幕府官園の補助機関としての地位を固め、また、葛屋・薬種商としても発展していった。

このような例からも明らかのように、宇陀地方から吉野地方にかけては、各種の薬草の供給地

であったことから、大和の中南和地域を中心に薬種、製薬業者が多く興り、天明三(1783)年には、薬種屋株、合業屋株の設立が奈良奉行所で認可されている。宇陀地方にも薬種、和薬、合業を扱う店が多くあり、全国的に名を馳せていたよう

である。このような状況のもと近代に至っては、宇陀地域からは何人もの製薬企業の創業者を輩出した。以下、ご紹介する。

津村重舎は、明治二十六(1896)年に「中

## 宇陀から製薬企業の 創業者を輩出 (6章)

宇陀市教育委員会 柳澤一宏

将湯本舖津村順天堂(現ツムラ)を創業、同時に、故郷から受け継いだ秘薬をもとに改良した婦人保健薬「中将湯」を発売した。この秘薬とは、母の実家が檀家である青蓮寺

の過程で出る屑を従業員が持ち帰り、風呂に入れてたところ、夏のおせもが消え、冬には体がよく温まるという経験をヒントに、「へすり湯中将湯」を発売し、さらにこれを

に代々伝えられていたもので、逃亡中の中将姫をかきまいった際のお札に製法を教えられた薬(中将湯)であったという。明治三十三(1900)年、中将湯を精製す

安民は、明治三十二(1899)年に「信天堂山田安民薬房」(現ロート田安民薬房)を創業し、胃腸薬「胃活」を販売した。明治四十二(1909)年には、眼科医井上豊太郎

が処方した点眼薬を調製し「ロート目薬」として発売した。当時、流行性眼病がはやっていたこともあって、これも大ヒット商品となった。

山田安民の長男・山田輝郎は、創業50周年を機に「ロート製薬株式会社」を設立し、社長に就任。信天堂山田安民薬房の事業を継承すると共に、故郷の榛原町(現宇陀市)に多額の寄付を行っている。

薬品、現アステラス製薬)を創業し、家庭用防虫材・防臭剤の「藤澤樟脳」を発売した。藤沢友吉の母方の実家(現宇陀市歴史文化館「薬の館」)が、前述の森野旧薬園にほど近い松山町内にあっ

た。このほか、下痢止め・整腸薬のアイフの創業者も、この宇陀の出身である。

以上のように、宇陀ゆかりの企業や、今も馴染みの薬がいくつもある。宇陀は、古代の薬籍に始まり、江戸時代には薬種・製薬業者の興隆があり、製薬企業の創業者を輩出する素地は十分にあった。

(文中：敬称略)

# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

大願寺は、大宇陀道の駅の裏手の小高い丘の上にあります。山門をくぐる、こじんまりした境内には本堂、毘沙門堂、仏足堂、庫裏がありま

す。明治18年、本堂、宝蔵等全焼の災難にあり、伝来の仏像も多く消失しました。  
 創建は古く、推古天皇の時代、聖徳太子が蘇我馬子に命じて建立させたといえられ、薩摩山と

たさん)大願寺と号し、真言宗御室派で京都の仁和寺の末寺です。御本尊十一面観音像は724年、徳道上人の作と伝えられ、織田松山藩の祈願所として厚く保護されてきました。

折願寺であったというところで、現在でも檀家が一件もないという事情から、寺を維持するために現任職とその母が宿坊を始めました。最初は宿泊客に合わせ、鍋物などを

出してたようですが、その後、祖母が亡くなり、母が引き継ぎました。そのうちに、境内や裏山から採った薬草の天麩羅や、山菜を使った料理を出すようになりま

男は鹿を狩って角をとり、女は薬草を摘む日本での最初の薬膳の里でありました。近くには森野旧薬園があることなどから、35年前に薬草を使った精進料理を始めることになりました。

私自身は縁があり、25年前から薬草料理に携わっています。料理のほうは僧堂での精進料理、お茶の懐石料理の経験がありました。その後、厨房を任せられるようになり、器を変え、献立を改良しました。大宇陀の特産品である吉野葛を使った本葛のお刺身も、森野吉野葛本舗の先代社長に教えていた



薬草料理と下クダミ



## 「大願寺の薬草料理」 について(7章)

### 大願寺住職 高祖昭稔

す。大和というロケーションと、薬草料理という珍しさも手伝ってか、お昼の薬草料理だけの予約が多くなり、宿坊はやめることになりました。宇陀の地は推古19(611)年、薬狩りをした記述が日本書紀にあり、

男は鹿を狩って角をとり、女は薬草を摘む日本での最初の薬膳の里でありました。近くには森野旧薬園があることなどから、35年前に薬草を使った精進料理を始めることになりました。

私自身は縁があり、25年前から薬草料理に携わっています。料理のほうは僧堂での精進料理、お茶の懐石料理の経験がありました。その後、厨房を任せられるようになり、器を変え、献立を改良しました。大宇陀の特産品である吉野葛を使った本葛のお刺身も、森野吉野葛本舗の先代社長に教えていた

喜びで賣える人に、この上質な資源を情報を含め、どう提供していくかが今後の課題と見えます。これからも微力ながら精進努力を続けていきたいと思っています。





# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

高取藩主植村家政は、寛永17年10月19日、高取城主となり、高市郡内及び吉野郡内の一部を領した。初代植村家政以来徳川幕府譜代大名として重視され、老中35氏の列に入っており、2万5千石の小大名と思いが、御領所を合すると優に10万石の大名に比すべき高取城主であった。

代々高取藩は、薬園師に帰の開業し、遠近より

苦勉勵し、18歳で高取藩に帰の開業し、遠近より

治をそつ人が門前市を成すに至るとあり、寛政4年冬10月より医を以て高取藩主植村侯に任せ、医療医薬について藩政を進めた。文政3年正月18日病を以て逝く。これをきくもの哀惜の情藩内に満ちた(享年69)

後を継いだ養純は弟であったが、宗賢の意志と藩主の思いを広く藩民のため医療、医療に努力している。また文政元年3月21日、養純が没した。後ほかつて、高取藩の医

園師の指導や医療に関する発信をしたことがうかがえる。時代が遠く藤原京時代に遡るが、奈良国立文化財研究所の発掘調査などで、藤原京から出土した木簡から、1300年前から漢方薬が使用されていたことや、典藥寮という医療施設があったことが判明している。「麦門冬三合」という木簡からは、売薬に今も使われている「じゃのひげ」とも称される百合科の植物が鎮咳解熱に用いられていたことが読み取れる。

そのほかに、大黃(タデ科)に属する根や茎を用いる」と書かれた木簡、竜骨と書かれた木簡も出土している。奈良東大寺の正倉院には百数十点もの竜骨(動物化石)が残っている。精神安定剤として使用されていたものといわれている。既に1300年前、藤原京では典藥寮などがあり、医療行政もすでに充実していた。

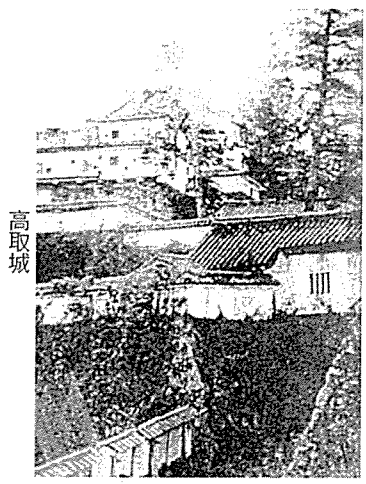
南朝時代から続く高取城を経て近代高取藩は、232年間の藩政は医療のモデルにした藤原京時代の流れの中にあつたと思われる。全国一円に現在も売薬として足跡を残している、高取藩植村城主232年間14代にわたる藩政の残した医療医療藩政を大切に、これからも大いに発信してほしいと思う。

## 大和高取藩植村城主の沿革と藩政(9章)

檀原文化協会会長

戸田守亮

(薬草の栽培)並びに医師、針師、按摩師(マッサージ師)の専門家を大切にし、奨励もしていた。代表的な人物としては、本草(漢方薬等)医学に通じて高取藩の医官として活躍していた服部宗賢と思われる。15歳で京都に遊学し困



高取城

官として仕えていた、父宗賢の長男である時亮が意志を引き継ぎ、医療医薬を広め活躍した。このように、高取藩は医療、医薬についても振興の藩政を広めたことは徳川幕府の譜代大名として、江戸の將軍はもちろ

ん、幕閣大名にも広く薬

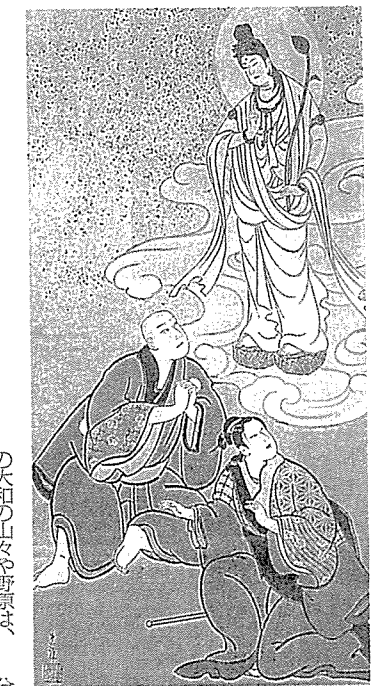
生薬供給をめぐる緊急特別シンポジウム 東洋医学会 日本東洋医学会の学術総会が6月29日から7月1日までの3日間、国立京都国際会館を会場に開かれる。特別講演と教育講演が各3題や、多彩なテーマによるシンポジウム及びワークショップが

予定されている。2日目の「生薬供給の現状と今後の課題」と題した緊急特別シンポジウム、6日目の「ISO/TC235 およびISO/TC236における国際標準化の現況」と題した特別企画のディスカッションは、今後の漢方治療や生薬の流通サイドにとって重要な問題だけに注目が集まる。

薬事日報 2012年5月30日  
「土から体へ」  
薬草・漢方薬の長い旅 9  
「大和高取藩植村城主の沿革と藩政」

# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

壺阪寺は、南に桜の吉野、北は大和三山、奈良の盆地を一望におさめる山に建つ。元興寺の弁基上人が、この山にひかれて修行していたころ、愛用の水壺の壺の中に観世音菩薩を感じたので、その壺を坂の上に安置、供養し、壺阪観音を模刻して、本尊としたのが、壺阪寺の始まりである。その年は大寧3年（西暦703年）と伝わっている。その後、元正天皇（在位の時勅願寺となり、その折「南法華寺」



お里・澤市のイラスト

草など自然の恵みへの感謝の気持ちで新たな気持ちで思っている。歴史を紐解いていけば、壺阪寺が開創した折には、すでに高取では薬狩りが始まって90年以上の歳月が経っていたことが分かる。その薬事と縁が最初からあったせいも、明治時代からであるが、目薬を境内で処方している。現代でも処方薬の歴史は続いている。前述した弁基上人の模刻した壺阪観音が、眼病に靈験があると、開眼間もないころから信仰を集めた。その信仰は、江戸時代のお里・澤市の壺坂靈験記を生み、昭和になつては、その縁から目の不自由なお年寄りの福祉へ寺を動かしている。薬狩りをしてきた高取の山々の一つに修行場を置き、日夜律定した弁基上人が愛用していたのは、水壺の壺であった。そこに感得したのが観世音菩薩。壺といえは、薬壺を思い出す。当寺の薬師如来も、その御手に薬壺を持つ。上人も壺に薬狩りの薬壺を入れて修行に励んだ。その薬草の入った壺に観世音菩薩が現れた。大和の薬草の本当のお姿は観世音菩薩かもしれないと思う。

## 薬狩りが始まって1400年、 壺阪寺と薬(10章) 常盤勝範

壺阪寺住職

常盤勝範 常盤勝範は、常盤の健康維持になんてはならない薬、その薬を山中などの自然界に求め出した薬狩りは、宇陀の地で始まり、平成23年で1400年目を迎えた。来

共に、その薬事となるような薬壺を壺蓋に蓄え、供給できた大和の山の自然の恵みを感じた。また、薬壺は文字通りの自然の恵みであり、様々な自然条件が合致しなければ、この大和に分布されなかったであろうが、不思議な縁を得て大和に豊饒に自生し、薬狩りの歴史が始まり、その歴史が、現代の大和の薬へと今なお脈々と流れていることに感謝したい。再び、薬狩りを始められた先人たちの苦勞を想すれば、1400年前の大和の山々や野原は、また未開の地も多く、その薬草などの採取には、現代の私たちにない危険な場面に出遭ったことは容易に想像できる。その中で得た薬草、そしてその薬事の知識は、現代の私たちの日常の健康増進の基礎になっていることは間違いない。1400年の節目に当たり、先人たちの苦勞を偲び、薬

都女性薬劑師会が夏季漢方講座開催  
 東京都女性薬劑師会は7月22日午前10時から品川区の星薬科大学で「夏季研修会漢方講座」を開催する。問い合わせは同会まで。

「心身症に対する漢方的な見方とその治療」生薬からみた補劑の臨床応用「漢方薬の服薬指導とその根拠」をテーマに、北里大学東洋医学総合研究所漢方診療部、横浜薬科大学漢方薬学科の演者らがそれぞれ講演する。

# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

今なお、承継されてい  
 る「たかとり」の町。たかと  
 りの薬祖神祭」のルー  
 ツは、大正14年、三輪明  
 神大神社祭神の一つで  
 ある大物主命、辺都盤座  
 (へつこはへ) 即ち、  
 少彦名命の分身をお下げ  
 頂ぎ、執り行われた「薬  
 祖大神の祭典」とされる。

祖神の御分身をお下げ  
 頂いた理由は定かではな  
 いが、恵比須神社のお社

代に下土佐の「えびす神  
 社」に薬業の発展を祈願

ているお社は、昭和27年  
 「神農さん」が広く大衆  
 に薬の祭りのとして、また

「少彦名命」は「すく  
 なひこのみこと」と読  
 み、日本における医薬の  
 祖と言われる神様で、大  
 国主命(おおくにぬし)の

## たかとり「神農薬祖神祭」(11章)

奈良県製薬協同組合理事長

梶谷順久

明治末期から大正にか  
 けて、高取町における薬  
 業は全盛期でもあり、毎  
 年、町内の業者が薬祖の  
 神様に対する信仰崇拜の  
 念を忘れず大祭を厳修さ  
 れ、今日まで代々継承  
 されている。

に併祀していた御分身を  
 新たな社に建造し、ここ  
 に再度御分身をお下げ頂  
 いたと思われる。また、  
 祖神の御分身が何故に御  
 鎮座されていたか確かに  
 伝わるものはない。

しょうとして建立され  
 た。その後、町内の業者  
 が薬業連合会を組織し、  
 この連合会が主催して  
 「神農薬祖神祭」を毎年  
 執り行い、今日に至っ  
 ている。

薬業界の神農信仰文化と  
 して根づいてきたことに  
 ある。

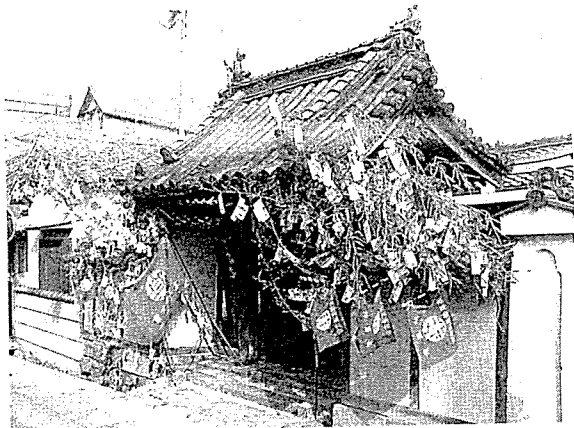
併せて、日本の医薬の  
 神である「少彦名命」を  
 薬祖神と祀りながらも、  
 薬業界における神農さん  
 が広まり親しまれたこと

みことと共に、国作り  
 をした小人神である。

少彦名命は大國主命と  
 力を合わせ、心を一つに  
 して天下を治った。現世  
 の人民と家畜のために、  
 病氣治療の方法を定め  
 た。また、鳥獣や昆虫の

災いを除くために、まじ  
 ないの法を定めた。この  
 ことにより、人々は今日  
 に至るまでその恵みを受  
 けている。

「神農祭」とは、農の  
 神と書くように本来、こ  
 の神様は古代中国の神話  
 に登場する帝王で、この  
 神は絵や彫刻には、頭は  
 角の生えた牛、身体は人  
 間、薬の葉の衣をまと  
 い、口で草を噛んでいる  
 という奇妙な姿で表わさ



「日本書記」によると、  
 これら両神をもって「わ  
 が國の祖」としている。両  
 神は国作りを進めなが  
 ら、医薬、まじない、酒  
 造り、温泉療法等を開発  
 し、人々の医療に尽くさ  
 れたとされている。

今年も11月には例年通  
 り、下土佐えびす神社に  
 て「神農薬祖神祭」い  
 わゆる「神農さん」が執  
 り行われる予定である。

# 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

## 高取町における 薬草栽培計画(12章)

高取町薬業連合会会長

中村善之

本草の語源は古く高取町が、日本書紀の記述で因んで1400年ぶりに「薬草」を再興するイベントを、彼多野神社で行いました。当時は晴天にも恵まれ、参加された多くの方々を古代衣装を穿せた「タマシ」(身置)が案内し、実際に薬草を採取するなどの体験をしていただきました。このように高取町の薬との関わりは古く、その一環として、漢方時代以降の

配製薬の歴史を辿りながら、20世紀に入ると日本の医薬品は、中国由来の医学が主流となっていた。戦後の漢方薬は生薬が主で、中国から種苗を輸入するも、国内でも生薬栽培・採取が試みられています。大和(奈良)では歴史的な地産地消の体制となり、1700年代から1800年代にかけて

り日本人の体質に合った、優良な生薬の種苗が育てられていました。しかし、明治時代になると生薬栽培は北海道大規模農法の品目に組み込まれ、なるべく手間をかけない大産生できるものだけが残りまし。そして、それ以外の従来品種は奈良原などの篤農家の



園で、ごくわずかに維持されている状態でした。そのような状況の中で、現在のわが国の最大の漢方薬材輸入元は中国です。その中国産の薬材が、昨今の気候変動および国際経済の変化の中で高騰してきているのに呼応して、日本各地で漢方薬材の栽培が始まっています。

たどるば、カンソウは乾燥地を好むため湿度の高い日本では自生しないとき、現状では金盞花を輸入に頼っています。しかし、千葉市のベンチャー企業「エーベル」は、漢方薬の主原料となる「カンソウ」を独自の方法で市内の農地で栽培することに成功したと、昨年3月に発表しました。



ます。園で、ごくわずかに維持されている状態でした。そのような状況の中で、現在のわが国の最大の漢方薬材輸入元は中国です。その中国産の薬材が、昨今の気候変動および国際経済の変化の中で高騰してきているのに呼応して、日本各地で漢方薬材の栽培が始まっています。

たどるば、カンソウは乾燥地を好むため湿度の高い日本では自生しないとき、現状では金盞花を輸入に頼っています。しかし、千葉市のベンチャー企業「エーベル」は、漢方薬の主原料となる「カンソウ」を独自の方法で市内の農地で栽培することに成功したと、昨年3月に発表しました。

ます。園で、ごくわずかに維持されている状態でした。そのような状況の中で、現在のわが国の最大の漢方薬材輸入元は中国です。その中国産の薬材が、昨今の気候変動および国際経済の変化の中で高騰してきているのに呼応して、日本各地で漢方薬材の栽培が始まっています。

たどるば、カンソウは乾燥地を好むため湿度の高い日本では自生しないとき、現状では金盞花を輸入に頼っています。しかし、千葉市のベンチャー企業「エーベル」は、漢方薬の主原料となる「カンソウ」を独自の方法で市内の農地で栽培することに成功したと、昨年3月に発表しました。

わが高取町も、「種々の町」高取町の名が示す通り、町民の中で薬関係に従事している、あるいは、していた方が大勢おられ、医薬品メーカーが、おられる「薬の町高取」です。町では一部開闢予定の種々の森公園内に約5000㎡の薬草園

①薬草の栽培者を集

め、県の施設で栽培研修会の開催

②薬草生産者で組合を

結成

③組合が種苗を取りま

ちめる

④県または町が生産者

に作付け面積を割り当て

る

⑤組合は技術面でも生

産者を支援する

⑥組合は生薬卸売業

者・製薬業者に生薬物を

販売する

# 古都奈良の世紀植物

## 機能を求めて(13章)



万葉集には葛(くず)

を詠んだ歌が21首登場

し、「饗余いわれ」や「春

日」佐紀二阿太といっ

た奈良の地名を詠んだ歌

もある。葛に関わる歌の

多くが、その旺盛な繁殖

力や蔓が伸びていく様を

詠んでいる中で、山上徳

良が詠んだ次の歌は、秋

の七草が万葉の時代にす

でにあったことを物語っ

ている。

秋の野に咲きたる花を

指ひ折りかき数ふれば七

草の花(万葉集巻八、1

537)

秋の花尾花葛花などし

この花女郎花また藤袴朝

貌の花(万葉集巻八、1

538)

葛は山野に自生する豆

科Pentagonaceae属のつる性多

年生木本で、生活力が非

常に旺盛で、茎は10m以

上にも伸び、葉は径約8

cmの三つ葉型で互生し、

総状花序は長さ15〜18cm

で腋出し、夏から初秋に

かけて紫赤色の香気ある

花を密につける。葉は家

畜の飼料に、つるは葛布

畿央大学大学院健康科学研究科教授

北田 善三

に、花は二日酔いの薬に、そして根は漢方薬や葛粉として利用されてきた。

奈良は古来より薬と深い関わりがあり、疫病に備えて薬用植物が栽培されたほか、中国から渡

来した生薬の集積地でもあった。「大和誌」(1736年)には宇陀、高

市、宇智、吉野など南大和の諸郡で地黄や当帰、

人參、大黃などを産出すると記され、そのほか葛根など山野に自生するものも利用されていた。

大宇陀町にある森野旧薬園は、現存する日本最古の私立植物園で、享保14(1729)年に、森

野初代藤助通貞により創

始されたもので、現在に受け継がれている。その通貞が記した原色植物画「松山本草」の葛草藤の項に葛が描かれている。葛根は、葛の根部のコルク皮を剥き、5〜8mm立方のサイコロ角に細切りしたもの(角葛根)が流通している。葛根は中国最古の薬物学書といわれ

る「神農本草経」で中品に分類されている漢方の要薬であり、服用にあたってはフラボン類を基準としている。

葛根のフラボン類にはプエラリン、ダイズイン、ダイゼインなどがあり、これらフラボン類の一部が葛粉にも含まれており、葛粉が古くからか

せひきやお腹をこわした時の栄養食として用いられてきた理由の一端が、これらフラボン類にあるのではないかと考えられる。

葛の根には良質のデンプンが含まれており、それを

取り出したものが葛粉で、山野に自生する葛の根を冬季に掘り起こし、粉砕して水と混ぜデンプンをもみ出し、吉野晒しという伝統的な製法で精製したもので、吉野葛あるいは吉野本葛と呼ばれている。冬の冷たい水で清めることにより純白のデンプンとなり、その後2カ月ほど冷たい空気を当てながら乾燥させて吉野葛が完成する。

吉野町には国栖という地名があるが、ここに住む国栖人は葛の根からデンプンを採取し、里に出て売ることがあり、いつしかそのデンプンを「タス」と呼ぶようになったという言い伝えがあり、これが葛粉の始まりと考

えられている。谷崎潤一郎の作品に

「吉野葛」がある。葛粉を扱った内容ではなく、吉野という土地の美しさを描き出しながら、母子の情愛を描いた名作である。ここに登場する母の妻家というのが、吉野川を越えた吉野町寺垣内での国栖のすぐ近くである。

吉野葛以外にも、全国に秋月葛(福岡)、熊川葛(福井)、丁葛(掛川)などの名称をつけた葛粉があるが、その中でも今日残っている有名なものが吉野葛である。

宇陀市や御所市などには、今も伝統的な吉野晒しの技法を用いて葛粉を製造する業者があり、全国の老舗といわれる料亭や和菓子メーカーに葛粉を提供しており、2007年には特許庁より「吉

野葛」「吉野本葛」に関して地域団体商標の登録許可が認められ、地域ブランドとして広く国内外に発信できるようになった。

また、奈良県では2006年から地域の伝統的食材の商品化に向けた産直連携のプログラムを立ち上げ、その中で葛のつるに骨粗鬆症を予防する効果のあることを見出し、また、筆者らは酵母 No-yeast 法により、葛フラボンにエストロゲン作用があることを明らかにした。

このように、古来より奈良は葛とはいへん緑の深い地で、これからも伝統に新しい知見を交えながら、葛とのつながりが続いていくものと思われ。

谷崎潤一郎の作品に



葛の花

奈良県吉野郡下市町には「問屋橋」という橋があつて、薬種問屋が軒を連ねていたという歴史があります。江戸時代以前に薬種の集散地であつたことこの記録はありませんが、吉野、大峰山系の陀羅尼助丸の発祥が奈良時代であり、古くから生薬の供給を担ってきたものと推測されます。

第二次世界大戦前後からの食糧増産や、合成薬の普及により、吉野地方での生薬栽培が衰退して、問屋街はなくなつてしまいました。大和の下市史に武田英昭氏の「下市の薬園」という詳細な記録がありますので、抜粋

し、報告します。

◇◇◇  
 わが大和では、天武天

皇の8年に飛鳥浄御原京に本薬師寺が建立された時、その寺域に薬園が設

けられたと伝えられてい。大宝令には、典薬寮に薬園師、薬園生、薬

明皇后が施薬院を創立さ。平城宮の南方に薬園が設けられた。また、天

し、忍性和尚は極楽寺境内に療病舎を建てて施薬。したほか、多くの僧侶に

を置き、元禄年間には一部に薬園奉行が置かれて、領内に有用植物の栽培園芸植樹などを奨励

を設置したことが、幕府の採薬使植村左平次政勝の書いた「諸州採薬記」に記録されている。

上、岡谷らは江戸に出仕したが、森野藤助は辞退して、享保14年12月9日、下市において公儀より揮額の七根(甘草、東京肉桂、烏臼木、天台烏薬、山菜蓼、杜桐樹ほか

## 下市の薬園と薬種問屋の話(14章)

株式会社前忠社長 前忠兵衛

### 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅



下市御坊願行寺

戸の制度が定められ、当時医薬に關する相当の知識経験があつたものと想われる。

平勝宝6年2月、平城京に來た唐僧鑑真は本草に精しく、後に大仏供養に用いた薬物は今も正倉院に保管されている。

よって医薬による窮民の救済が行われたもので、存覚上人なども薬種の普及に努めたと伝えられている。

徳川幕府となつてからは、本草医薬に關する発達が目まじしく、寛永年間には江戸城の南北に薬園を開いて園監、薬園師

を配置したことが、幕府の採薬使植村左平次政勝の書いた「諸州採薬記」に記録されている。

松山の森野藤助、下市の畠山栄長、井上孫左衛門、岡谷臺右衛門及び天川の中谷村藤左衛門が出身した。採薬使と同行して功勞のあつた5人は御家人に取り立てられ、畠山、井

出仕した3人のうち、畠山は老後下市に戻り没したと思われ、井上は江戸にて没している。岡谷は朝鮮人参をわが国で改良栽培し、安価で供給することを苦心し、名声を高めた。

# 万葉の楽園プロジェクト(15章)

## 大和シャクヤクの復活を目指して

万葉の楽園協議会

(八房建設、堤野組、森本組、山本工業)

山辺 元康

奈良盆地の東南に広がる三輪山のふもとから、東北部の菅草山に並んでいる春日山のふもとまで、盆地の東端を山々の裾を縫うようにたっているのが、「山辺のみち(やまのべのみち)」です。「山辺のみち」の名称は古事記では、素戔天皇の系「御陵は山辺の道

のまがりの岡の上にある」と同じく景行記には「御陵は山辺の道」にあり」とあり、これらに由来すると言われています。この地は、古来より生薬の栽培に適していると

現在では、その栽培の難しさや、外来種が多く輸入されるようになったこと等から、栽培を続ける人が極端に減ってきたとも聞きます。

われわれ「万葉の楽園協議会」は、奈良県内の建設業者4社が協力して結成しましたが、この地で古の昔から育てられていた大和シャクヤ

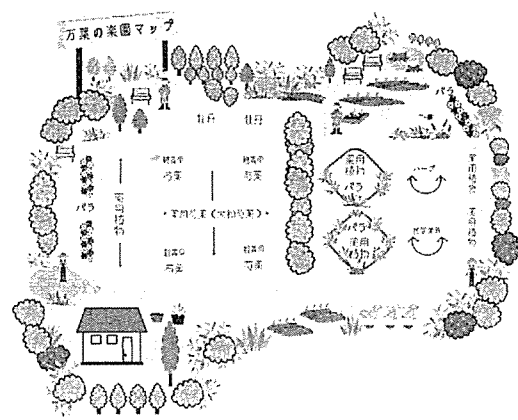
クを復活させることを目的として「万葉の楽園」を建設することになりました。シャクヤクが日本に渡

などにも人気が高い花です。シャクヤクの根は、消炎、鎮痛、抗菌、止血、抗けいれん作用を有し、漢方薬などに配合されますが、奈良で栽培される大和シャクヤクは、気候や土壌がその栽培に適している良質なものが産することから、古くから漢方薬局などにおいて珍重されてきました。

大和シャクヤクの一つに「梵天」と呼ばれる品種があります。5月中旬旬に白花を咲かせる薬用として優れた品種とされています。しかしながら、種から栽培すること

ができず、株分けでしか繁殖させることができないことから、大量に増やしていくことが難しくなっています。花圃では、この「梵

天」のほか、四季折々に楽しめる木々や草花を栽培し、山辺の四季の移り変わりや薬草たちが育って行く様子を、山辺の道をハイキングされる皆様にお楽しみいただきたいと思っています。切り花や薬草を使った入浴剤等の販売も計画しています。花を見ながら一休みしていただける場所もご用意する予定です。2013年春の花が咲く頃のオープンを目指していますが、皆様にも少しでも薬草に興味を持っていただきたいと思います。ご期待下さい。



薬事日報 2012年11月28日  
「土から体へ」  
薬草・漢方薬の長い旅 15  
「万葉の楽園プロジェクト」  
～大和シャクヤクの復活を目指して～

**「土から体へ」**  
薬草・漢方薬の長い旅



# 漢方薬と中薬と生薬製剤(16章)

日本生薬連合会技術参与(薬学博士)

嶋田康男



ジオウ

「薬草・漢方薬の長い旅(1)」で連載された「宇田・阿野の薬草」で採られた薬草は、どのように利用されたのでしょうか?

紀元600年頃から薬草が行われていますが、その頃、遣唐使や遣唐使により、日本に漢方が伝えられたとされています。から、薬草で集められた生薬が漢方薬を作るのに使用されたとしても、不思議ではありません。しかし、果たしてそうでしょうか?

「薬草・漢方薬の長い旅(1)」で連載された「宇田・阿野の薬草」で採られた薬草は、どのように利用されたのでしょうか?

紀元600年頃から薬草が行われていますが、その頃、遣唐使や遣唐使により、日本に漢方が伝えられたとされています。から、薬草で集められた生薬が漢方薬を作るのに使用されたとしても、不思議ではありません。しかし、果たしてそうでしょうか?

しょうか?

実は、薬草で採取された日本で取れたであろう生薬や、正倉院に残されている種々薬帳(簡単に言えば正倉院の薬保存リスト)に記載されている生薬では、漢方薬は作れないことが明らかになっています。

それは、漢方薬と、陀羅尼助のような伝統薬と、ミも含めて一般の方の理解は、同じ漢方だと受け止められ、混同されているようです。

それは、漢方薬と、陀羅尼助のような伝統薬と、ミも含めて一般の方の理解は、同じ漢方だと受け止められ、混同されているようです。

ば、奈良の伝統薬を例に取れば、胃腸薬の陀羅尼助は、役行者(役小角)が創薬し、大宰山や吉野の修験者が利用し、各地に広めたとされています。

では、漢方薬と、陀羅尼助のような伝統薬と、ミも含めて一般の方の理解は、同じ漢方だと受け止められ、混同されているようです。

では、漢方薬と、陀羅尼助のような伝統薬と、ミも含めて一般の方の理解は、同じ漢方だと受け止められ、混同されているようです。

では、漢方薬と、陀羅尼助のような伝統薬と、ミも含めて一般の方の理解は、同じ漢方だと受け止められ、混同されているようです。

る中薬(中医薬)は違うのでしょうか? マスコ

よつに中国から日本に伝来し、その後、中国で2世紀頃編纂された「傷寒論」や「金匱要略」に記載された処方原典とほ

よつに中国から日本に伝来し、その後、中国で2世紀頃編纂された「傷寒論」や「金匱要略」に記載された処方原典とほ

よつに中国から日本に伝来し、その後、中国で2世紀頃編纂された「傷寒論」や「金匱要略」に記載された処方原典とほ

## 「土から体へ」 薬草・漢方薬の長い旅

入ってきた蘭方(西洋医学)と区別するために漢方と呼ばれており、使用する人の体質や症状(証)、その他の状態に適した処方を既成の処方の中から選択して用います。

一方、中医薬は、日本に漢方を伝承してからも、さらに近代まで中国で理論化され、体系化されたもので、漢方では全く使用しない生薬や処方を用いることもあるものとなっています。したがって中国で使用・販売されている生薬製剤は、漢方薬ではないことを十分に理解する必要があります。同時に、日本の薬事法では基本的には使用が認められていないものが多

く、使用されない方が無難でしょう。それでは、前述した陀羅尼助等の伝統薬や生薬製剤(六神丸、奇心丸、救命丸、実母散等)は漢方薬ではないと書きましたが、何に当たるのでしょうか?

漢方薬の場合には前述したように、証や体質により薬を選択する必要がありました。したがって、これらの伝統薬や生薬製剤は、それらには関係なく、症状だけで判断して薬局などで消費者が購入し、服用することができず、ただしく、漢方薬のような原典に類するものはなく、製造している企業により処方とは異なっています。これらの薬は、漢方も

参考にしたが、民間伝承で使用してきた民間薬(原則生薬単味で使用)を、智慧で組み合わせ製剤化したものだと思われ、和薬・和漢薬と呼んだ方が良いのかも分りません。

これら漢方薬、中医薬、伝統薬・生薬製剤は、やはり医薬品である以上、副作用もあり、医師・薬剤師や登録販売者の指導に従い、適正に使用する必要があると思われ、民族の知恵が結集したもので、先人が残してくれた財産とも言えるものです。これからも大切に使う、後世に残していきたいものです。

これら漢方薬、中医薬、伝統薬・生薬製剤は、やはり医薬品である以上、副作用もあり、医師・薬剤師や登録販売者の指導に従い、適正に使用する必要があると思われ、民族の知恵が結集したもので、先人が残してくれた財産とも言えるものです。これからも大切に使う、後世に残していきたいものです。

これら漢方薬、中医薬、伝統薬・生薬製剤は、やはり医薬品である以上、副作用もあり、医師・薬剤師や登録販売者の指導に従い、適正に使用する必要があると思われ、民族の知恵が結集したもので、先人が残してくれた財産とも言えるものです。これからも大切に使う、後世に残していきたいものです。

参考にしたが、民間伝承で使用してきた民間薬(原則生薬単味で使用)を、智慧で組み合わせ製剤化したものだと思われ、和薬・和漢薬と呼んだ方が良いのかも分りません。

(三) 生薬製剤